枕頭ハネムーン計画

遠くでかすかに聞こえる男女の声。

「もう、いろいろ迷っていても仕方ないよ」男の声ははきはきとしていて、若々しい。「やっぱり、君の言っていたホテルのほうがいいよ。エステもついて一泊一万五千円なら安いもんだ。君もずいぶん気に入ってたじゃない」

「あら、わたしは、あなたが勧めてくれたホテルがいいと思うけど」女の声は、男よりも落ち着きがあった。「金額はすこし高いけど、あなたもずいぶん気に入っていたでしょう」

「僕に気を遣うことないよ」

「気なんか遣ってないわよ。わたしがいいなと思った方は、よく考えたら、お料理がいまいちだもの」

「いまいち？　蟹食べ放題が？」

「誰もが蟹好きと思ったら、大間違い」

「でも、君は好きだろ」

「大好きよ。ただ蟹食べ放題は、あなたお勧めのホテルの方だから」

「あ、そうだっけ」

「わたしの方は夕飯もビュッフェ形式なのよ。はじめて三人で行く旅行なのに、お夕食がバイキングじゃ、味気ないわ」

「そんなことはないと思うけどな」

「温泉の大浴場も狭そうだったし」

「温泉？　君が温泉好きだったなんて初耳だ」

「最近、気になってきたの。ほら、肘の、ここの所を見てよ。なんだかカサカサしてるでしょう」

「どれ。……あ、本当だ。カサカサしてるね」

「温泉につかれば治るかも」

「だったら、なおさらエステのほうがいいじゃない」

「エステなんて、小一時間もベッドのうえにじっとして、そのあいだ他人に体を触られて、血行がよくなって、むくみがとれて、いろんなもの塗られて、全身ツルツルになるだけよ」

「最高じゃないか」

「最高よ。でもそのあいだ、あなたが退屈しちゃうわ」

「温泉があれば退屈しないよ」

「あなた温泉好きなの？　初耳だわ」

「温泉が嫌いな日本人なんていないだろう」

「温泉にこだわるなら、やっぱりあなたのホテルの方がいいわよ。広い露天風呂が気持ちよさそうだった」

「広さはどうでもいいんだよ。狭くたって、肝心なのはお湯だからね。君のホテルは源泉掛け流しだし、泉質も……何だったかな」

「アルカリ性。あなたのホテルはラジウム」

「肌にいいのは？」

「アルカリの方。でもいいの。こっちのホテルは、近くにゴルフ場がないもの。あなた、

ゴルフしたいでしょ」
「ゴルフ？　ゴルフだって？？　そんなわけないよ。新婚旅行で妻をほっぽり出してゴルフに行く奴なんかいる？」
「だって、久しぶりにクラブの手入れしなきゃって言ってたじゃない」
「そんなこと言った？　いつ？」
「旅行代理店で」
「ああ、あれは、近々接待ゴルフがあるかもしれないのを思い出しただけだよ」
「あなた、ハネムーンの相談中に接待ゴルフを思い出したの？　……いいのよ。あなた、しばらくコース回ってないんでしょう？　あなたのホテルにしましょうよ。カサカサ肘には梅干しでも貼っておくから気にしないで」
「いやいや、ここはエステにするべきだよ。こいつはただの新婚旅行じゃない。僕が君と杏奈ちゃんにプレゼントする旅行だ。君優先じゃなきゃだめだよ」
「いいのよ。子連れの姉さん女房の包容力を、今こそ見せるわ。あなたはのびのびゴルフをしてらっしゃい。これまで窮屈な思いをしてきたんだから。私、キャディをやってあげる。……日に焼けちゃうかもしれないけど、そんなの平気」
「杏奈ちゃんが可哀想だよ。新しいパパがゴルフ三昧じゃ、それこそ退屈しちゃうよ」
「ママがエステ三昧でも同じことよ」
「そりゃまあ、そうか」
「でしょ？」
「いやいや、心配ないって。君が自分磨きをしているあいだ、僕が杏奈ちゃんと遊んでいるから」
「近くに子供と遊べる施設なんて、あったかしら」
「そんなものいらないよ。都会を離れた大自然さえあれば、杏奈ちゃんも喜んでくれるさ。大きな空と、きれいな海と、緑の芝生と……」
「緑の芝生、ね」
「いや、そういう意味じゃなくて」
「いいんだってば。ねえ、わたし、あなたに楽しんでもらえる旅行にしたいのよ。あなたが杏奈のパパになってくれて、とっても感謝しているの。たからお願い、わたしのために、ゴルフにして」
「それを言うなら、僕のためにエステにしてよ。結婚してからこっち、旅行なんかしていなかったんだろう？　僕だって妻になる人の肘は、ガサガサよりツルツルの方がいいよ」
「ガサガサ？　わたし、カサカサのつもりだったけど」
「違う。口が滑った。カサカサだよ、カサカサ。君の肘はカサカサ」
「何度も言わなくていいのよ」
　まるで睦言のような論争の中、幼い声が割り込む。
「ママ」
「……あら、あなた起きてたの？」
「ママ、わたし、ゴルフ場がいい。ちさとちゃんが言ってたの。ちさとちゃん、パパといっしょにゴルフ場行ったんだって。広くって、きれいで、気持ちよかったって。私も見てみたいな」

しばらくの間、会話が途切れる。
柱時計の秒針の音。レースのカーテンをゆらす、そよ風の音。
やがて男の声が聞こえた。
「べつに、急いで決めることはないか」
「そうね。どっちにしろ、まだ日はあるから。籍を入れるのも、一年は先のことになるでしょうし」
「それまでのあいだ、ゆっくり探せばいいさ。近くにゴルフ場があって、エステの施設が充実しているところを」
「そうしましょう。多少金額がはってもかまわないわ。保険もおりるから」
「ママ」
「なあに？」
「お外で遊んできていい？」
「いいわよ。救急車に気をつけてね」
「はーい」
リノリウムの床を駆ける足音。ドアが開く音、閉まる音。
「いい娘だなあ。頭もいいし、やさしいし」
「ちょっと生意気だけどね」
「そのおしゃまなところが、また可愛いじゃない。今だって、僕に気を遣ってくれたんだろ？」
「あの娘、あなたのことが大好きなのよ。いままで大人の男の人に優しくされたことなかったから」
「僕も杏奈ちゃんは大好きだ。子は鎹って、本当だな。……まだ僕の子じゃないけど」
「いいえ。杏奈はあなたの子よ」
「そうだね。うん、そうだ。僕も立派に父親になれるように頑張らなきゃ」
「そうじゃなくて」
「そうじゃなくて？」
「愛情とか気持ちの問題じゃなくて、可能性の問題を言っているの。あるいは事実の問題。女って、そういうのわかるって言うでしょ」
「……嘘でしょ？」
「本当よ。今まで誰にも言ったことなかったけど」
「だって……いつの話？」
「六年前、最後に二人で旅行にいった時。わたしの結婚が決まって、これが最後だねって二人きりで伊東に行ったでしょ。たぶん、あの時。……びっくりした？」
「そりゃ……驚くよ」
「言わない方がよかった？　この告白であなたに嫌われることはないって確信があったから告白したんだけど」
「馬鹿だなあ。そんなんじゃないよ。それが本当なら、もちろん、こんなに嬉しいことはない。そうか、そうだったのか！　あの娘は僕の、本当の子供なんだ！」
男の声には、歓喜と感慨がしみじみと滲んでいた。
そのあとも、二人の男女は何かを話していた。しかしその声は、徐々に遠ざかっていっ

た。二人の声だけではなく、風の音も、時計の男も、何もかもが霞んでいった。
やがて、私の耳には何も聞こえなくなった。

※　※　※　※　※

ノックに続いてドアが開き、看護婦が部屋に入ってきた。
看護婦は二人に黙礼し、ベッドに近づいて患者の顔をのぞきこんだ。患者は体中に包帯を巻き、土色の顔をして、もう長くはもたないことが、素人目にもわかった。
看護婦は表情をひきしめ、覚悟を促すように女に言った。
「いま、先生を呼んできます。奥様も覚悟をなさってください。娘さんをお呼びになられた方がいいでしょう」
「社長、しっかりしてください。まさか社長がこんな事故に遭うなんて……」
男が声をふるわせた。女は顔をふせ、ハンカチを目にあてている。
看護婦は痛ましそうに目をふせた。しかし次の瞬間、患者の顔に何かを見つけ、眉をよせた。
その様子に、女が不安そうにたずねた。
「……主人の意識は、本当にもう、戻らないのでしょうか？」
「ええ、あの……戻らないだろうと先生から聞いていたんです。でも……」
「でも……？」
看護婦の視線にうながされ、女は患者の顔をのぞきこんだ。
そして息を呑んだ。
枕に頭を乗せた男の目尻に、一筋の涙がながれていた。